

「フィールドワーク」の実施状況について

人間文化学科長・フィールドワーク主任

藤 本 規 夫

はじめに

「フィールドワーク」という科目は平成12年度の改組に伴って設置された人間文化学科の専門教育科目の一つとして設けられたものである。従来からあった他学科の研修・留学制度は自主参加プログラムであるが、人間文化学科の「フィールドワーク」は選択必修科目であり、人間文化学科の学生は卒業までに最低2科目（2単位）を修得する必要がある。構成は次の通りである。

	対象地域・国	対象学年
日本文化研究Ⅰ	広島	2年次から
日本文化研究Ⅱ	ふるさと	2年次から
日本文化研究Ⅲ	沖縄	3年次から
日本文化研究Ⅳ	北海道	3年次から
国際文化研究Ⅰ	米国（ハワイ）またはモンゴル国	2年次から
国際文化研究Ⅱ	オーストラリアまたはネパール	2年次から
国際文化研究Ⅲ	韓国または中国	2年次から
国際文化研究Ⅳ	フランスまたはイタリア	2年次から

なお、これらの科目は全学開放科目なので一部の制限を除いて他学科の学生も参加でき、1科目につき1単位が与えられる。対象地域・国については学生の希望や現地状況などを勘案して年度毎に決定している。

〔平成13年度〕

平成13年度が最初の実施年であったが、2年次の学生が対象になる科目の中で実際に開講されたのは日本文化研究Ⅰと日本文化研究Ⅱの2科目のみで、国際文化研究はいずれも未開講であった。国際文化研究が未開講になった理由は、平成13年8月に実施を予定していた国際文化研究Ⅰ（ハワイ）および国際文化研究Ⅱ（オーストラリア）については参加希望者が皆無だった（費用の関係が大きい）こと、平成14年2月に実施予定だった国際文化研究Ⅲ（中国）は米国の9・11テロ事件の関係で中止したこと、国際文化研究Ⅳ（フランス）はもともと隔年実施の計画で平成14年度が最初の実施年であることである。

実施した日本文化研究の2科目についてその内容を下記する。

§ 日本文化研究Ⅰ（対象地域等：宮島。参加学生：人間文化学科2年生28名。引率教員：角重始。一般参加教員2名。平成13年8月6日～7日）

【趣旨・目的】 世界遺産である厳島神社を中心に宮島の歴史や文化財を調査研究し、併せて歴史と伝統のある管絃祭を見学する。

【実施内容】 平成13年8月6日 14:00に宮島棧橋に集合。船で宮島に渡り厳島神社見学および宮島歴史民族資料館訪問。21:00厳島神社入り口に集合、24:00まで管絃祭見物。宮島に宿泊の後、翌8月7日 09:00現地解散。（角重）

§ 日本文化研究Ⅱ（対象地域等：可部および能美島・江田島。参加学生：人間文化学科2年生4名。引率教員：杉元邦太郎。平成13年度前後期）

【趣旨・目的】 学生の出身地の地域文化の掘り起こしと地域の活性化について考察する。

【実施内容】 ①可部町史を利用して可部町の旧商店街の成立とその特徴を調査し、最後に旧道沿いの巡検を行う。②能美島（3町）と江田島町の地域巡検を行い、拡張の観光開発および地域振興計画について見聞。また話題になっている四町合併問題についてもそのあり方について現地で確認する。（杉元）

〔平成14年度〕

実施2年目となる平成14年度は国際文化研究Ⅱを除いてすべての科目が実施されることになる。国際文化研究Ⅱについては、オーストラリアに対する学生の関心が低い（費用の関係が大きい）ことと、ネパールは現地の治安状況が悪いため実施できない。

§ 日本文化研究Ⅰ（対象地域等：宮島。参加学生：人間文化学科2年生12名、3年生5名。引率教員：角重始。平成14年7月26日～27日）

【現地調査の内容・感想等】 14時に宮島棧橋前に集合。全員で厳島神社を見学・参拝したあと、15時から約1時間にわたって宮島歴史民俗資料館を見学。高橋修三副館長から管絃祭の概要説明を受ける。その後20時30分に長浜神社で御座船を迎える。大元神社へ向かう御座船を見送ったあと、町民参加の提灯行列に加わり、厳島神社拜殿においてお祓いを受ける。22時～3時30分、御座船の還御を客神社殿付近で見学。迫力ある御座船の三匝、優雅な雅楽の調べを堪能した。国民宿舎みやじま杜の宿に宿泊翌朝解散した。（角重）

§ 日本文化研究Ⅱ（対象地域等：京都。参加学生：人間文化学科3年生8名、2年生9名。引率教員：杉元邦太郎。平成14年12月19～22日）

【現地調査の内容・感想等】 本年度参加学生が多数となったことから、移動を伴わない「ふるさと研究」を行うこととした。行き先については学生との相談の結果、「日本文化の原郷」とでもいべき京都に決まった。現地集合ではあったが、ホテルやグループ分けなどはすべて学生の中のリーダーたちが行い、また現地見学・調査もグループごとに自主的に選定させた。その結果は引率者は各種相談や見学地の示唆をする役目だけで、旅行そのものには大きな負担を持つことはなかった。

学生は2～4名の6グループに分かれ、興味に応じて見学を主体とした研究を行った。多くは清水寺や三十三間堂などに立ち寄ったようであるが、遠くは大原や伏見にまで出かけたものもある。また今はやりの安部清明を祀る清明神社にもかなり行ったようである。

「フィールドワーク」の実施状況について

反省点は、見学地の選定は学生の自由に任せたために、内容にかなりのバラツキが出た。三日間のうち、せめて一日はテーマを持って集中的な研究を行うべきであると感じた。事前に日程を提出させておいたが、その日に気が変わって大阪まで出かけ、帰りの電車が事故の巻き添えを食い、帰りが11時近くなったグループもある。事前学習と日程の遵守は不可欠である。また季節的に冷たい雨が降り、また西本願寺など修築のためおおいがしてあって、残念がるものも多かった。帰路はさまざまで、奈良に立ち寄ったものもいる。(杉元)

§ 日本文化研究Ⅲ (対象地域等：沖縄。参加学生：人間文化学科3年生11名。引率教員：妹尾勝子。平成15年3月3日～3月7日)

【現地調査の内容】 実施時期が3月になったため、詳細は入稿時期に間に合わなかった。予定だけを記しておく。

3月3日：広島空港－那覇空港～糸満など。4日：沖縄県庁にて研修後フリータイム。夜琉球舞踊の鑑賞。5日：小型バスチャーターにて：読谷村、沖縄ガラス・琉球村など。6日：与那城町役場訪問後、フリータイム。7日：午後那覇空港～ろ島(一部福岡)空港。解散。(杉元)

§ 日本文化研究Ⅳ (対象地域等：北海道。参加学生：人間文化学科3年生5名。引率教員：栗生進。平成14年9月9日～13日)

【現地調査の内容・感想等】 趣旨は北海道の独自文化を、アイヌの時代、開拓の時代、現代の情報産業や観光産業の諸側面から調査研究することを目的とする。

初日は広島空港から新千歳空港に飛び、札幌市内見学、雪印乳業札幌工場およびサッポロビール札幌工場視察。2日目は新札幌駅を経由して北海道開拓村で研修。その後、大通り公園の旧北海道庁内の開拓資料を閲覧。3日目は北広島駅へ移動して、広島神社に参拝し、旧広島村を開いた人々を偲ぶ。その後、北広島市役所を訪問し、開拓の歴史と広島との交流事業について説明を受ける。午後小樽市に移動し、小樽運河を利用した観光客誘致の実態を見学。4日目は洞爺湖・登別観光。5日目は北海道大学を視察。午後の便で新千歳空港から広島へ帰着。

§ 国際文化研究Ⅰ (対象国：モンゴル国。参加学生：人間文化学科2年生1名、3年生3名、初等教育学科2年生4名。引率教員：藤本規夫。平成14年8月23日～30日)

【現地調査の内容・感想等】 モンゴル国の歴史・文化およびモンゴル国と日本の歴史的関係の理解を深めるために姉妹校の国立モンゴル大学の学生とともにウランバートル市内研修および草原での遊牧民生活を体験することを目的とする。

初日は関西空港からウランバートルへ到着(21:35)後、本学学生は一人ずつホームステア先である国立モンゴル大学の学生宅へ直行。2日目に国立モンゴル大学を訪問し、関係者に挨拶。その後、ウランバートル市内見学(スフバートル広場、ザイサンの丘、民族歴史博物館)、郊外のダンバダルジャー日本人墓地訪問。3日目は市内の自然史博物館見学の後、約2時間かけて草原の目的地に向かう。そこはテレルジ国立公園の中にあり、本学の学生8名と国立モンゴル大学の学生8名が遊牧民からゲル(移動式住居)を借りて3日間を過ごすことになる。食材は市内で調達して運び、料理人を一人雇った。学生たちはモンゴル料理を手伝ったり、乗馬をしたり、近くの遊牧民を訪問して交流したり、と草原での生活を満喫。草原で3泊した後、ウランバートルに戻り、夕方には民族芸能を観賞。滞在7日目は市内のJICA(国際協力事業団)を訪問し、日本のODA事業について説明を受ける。その後、ボランティ

ア活動として市内の河川敷の清掃作業を手伝う。最後の夜は国立モンゴル大学の学生と同大学の関係者に感謝する意味を込めて送別会を開催。8日目に直行便でウランバートルから関空へ帰着。

本学の参加学生は8人と予想外に少なかったが、結果的にはまとまりがよくて効果的な研修ができたと思う。モンゴルというあまり一般的でない対象国であり、予備知識も少なかったが、それだけに好奇心旺盛で冒険心に富んだ学生が参加した。姉妹校提携を結んだばかりの国立モンゴル大学の観光学科の学生8人は非常に協力的であり、ウランバートル滞在中はホームステイ先のホストファミリーとして本学学生を受け入れてくれた。担当の先生はこのように形で日本人を扱うのは初めての経験だったが、ホストファミリーの募集・選別などの準備段階から最後の空港での見送りまで、誠心誠意尽くしてくださった。草原では、遊牧民から借りたゲルに寝泊りしながら、近所の遊牧民家族を訪問したり、乗馬を楽しんだり、ハイキングをしたりと他の国では味わえない貴重な経験をすることができた。

羊一匹をモンゴル流に一滴の血も流さずに殺して解体する作業を見学、その肉を夕食として食べた。遊牧民が毎日飲む馬乳酒もご馳走になったし、牛の乳搾りも初体験した。

学生同士の交流は英語が基本であるが、英語が必ずしも得意でない本学の学生は身振り手振りをまじえたり、モンゴル語の本を持ち出したりしながら、一生懸命にコミュニケーションに努めていた。約一週間の滞在を経て、学生同士の友情が培われ、相互の文化の理解が深まった。

来年度以降も基本的には同じ内容のプログラムを組みたいと考えているが、参加人数は5～10人が望ましい。(藤本)

§ 国際文化研究Ⅲ (対象国：中国。参加学生：人間文化学科2年生4名、3年生3名。引率教員：日比野貞勝。平成14年9月2日～9日)

【趣旨・目的】 書は中国文化の中でも最も中国的なものの一つである。そして書はその形成期以来絶えることなく生生発展してきた文化で、西洋などに類例をみない特殊で美しい美術文化である。日本でもこの文化が摂取され、継承・発展、日本化されつつ開花してきているが、その圧倒的指導力は中国の書、中国文化そのものの中にある。“書が分かる”ようになるには中国の書、中国文化そのもの、またその土壌である風土に直に触れることと、これを継承している書人・文人等の生の揮毫に触れ、感得するとともに応答・交流することが一番である。中国各地の博物館や遺跡を訪問し研修する。また姉妹校である大連外国語学院を訪問し、書人・文人等との筆会や交流から伝統文化の継承・発展の粋に触れる。この国際文化研究Ⅲはそうした実見・触知をメインに置くが、事前の学習や事後の発表でこれを深めたり、日本の書道芸術や中国文化の理解の増幅に繋がるよう進める。

【実施内容】平成14年9月2日～9日(7泊8日)。

初日：広島空港から大連空港へ到着、大連外国語学院の蔡全勝日本語学院長と肖婷婷さん、(本学大学院OG)、スルーガイドの朱美玲さんの出迎えを得た。大連外国語学院の徐甲申先生と研修の詳細を打ち合わせ、夕刻からは旧知である張本義大連市図書館長の招待で晚餐会。2日目：大連市図書館を訪問。大連外国語学院の徐甲申先生と張本義館長の指導で筆会、交流会。学生は目下制作中の習作を呈示し、講評・指導を受けた。その後、大連外国語学院を表敬訪問。同漢学院にて徐先生の模になる摩崖・碑を見学し、その採拓の実習をした。上海に移動。

3日目：上海博物館で書画篆刻工芸品を鑑賞。朶雲軒にて文房四宝や書籍、拓本類の見学と

「フィールドワーク」の実施状況について

ショッピング。豫園で明代の私庭園と伝統的な樓閣を見学。江南の水郷風景と巨大なスケールで進む国家建設の姿を車窓から眺めつつ蘇州に移動。

4日目：盤門を見学。運河を絡めた城壁と城門・塔の独特の構造や歴史的風格を実感。留園では留園法帖を見学。太湖を遊覧して鎮江に移動。鎮江博物館で金農や鄭燮などの書画を鑑賞。

5日目：焦山に船で渡り、焦山碑刻を一巡し、後世に影響の大きかった南梁の瘞鶴銘を鑑賞。碑林管理事務所で同碑刻の全拓本を見学。南京博物館で書画篆刻工芸品を鑑賞。夕刻、中華門に登り六朝の都の姿や、戦乱の様子を想起した。夫子廟、貢院では儒教や科挙の舞台を見学。

6日目：北京に移動。高速道路を走って、万里の長城へ。急峻な城壁を登って、壮大な風景を満喫しつつ、歴史上のドラマを想起。居庸関を経て北京に戻る。車窓から見る北京郊外のIT産業や住宅群は上海同様、国家建設の勢いに圧倒された。

7日目：四合院の住宅を見学して、天安門、紫禁城へ。建造物、書画篆刻工芸調度品を見学。中国歴史博物館で殷・周代の青銅器を見学。夕方には雑技団の演技を鑑賞。

8日目：北京を発ち、大連経由で広島空港に到着。空港で解団式を行い、それぞれ無事帰宅。

【感想】“百聞は一見に如かず”参加者が一様に実感したことである。実見・触知した事、内容の大小・深淺は畢竟、個々の教養・関心度によるが、全体として意義深い研修旅行であった。ただ、中国の国家建設の進む中で博物館も立派になり、一級の書画篆刻美術品はお蔵入りして簡単に見学できにくくなっている。そのためにも益々、書そのものの理解は当然であるが、歴史・文化・社会、また中国語といった教養を身につけていること。そして友好関係（大連外国語学院や大連市図書館などの要人からの指導や紹介状など）を密にして、真摯で友好的な探求心を表現していないと、素通り研修旅行になってしまうと思われる。（日比野）

§ 国際文化研究Ⅲ（対象国：韓国。参加学生：人間文化学科2年生5人、3年生13人。引率教員：藤本規夫。平成14年9月8日～14日）

【現地調査の内容・感想等】日韓の歴史的関係を軸に韓国の歴史・文化に対する理解を深めるために、韓国各地を訪問し、また姉妹校である国立全州教育大学校を訪問し交流してきた。

初日に福岡空港から釜山に飛び、竜頭山公園、国際市場、チャガル市場見学の後、慶州へ移動。2日目は大邱市郊外の友鹿洞（友鹿里）を訪問。ここは「文祿の役」の際、朝鮮軍に投降して帰化した日本名沙也可の子孫が住む村落。沙也可から13代目にあたる金泰烈氏から話を聞く。その後、慶州で世界遺産の仏国寺、石窟庵を見学。3日目に東大邱から特急列車で大田へ行き、バスで全州へ移動。国立全州教育大学を訪問し、学内見学の後、市内観光。夜は同大学内で交流会の後、同大学の女子寮で宿泊。4日目は全州をバスで発ち、天安の独立記念館と水原の民族村を見学してソウルへ移動。5日目は北朝鮮との国境近くにある統一展望台で北朝鮮を垣間見る。その後、ソウルに戻って景福宮を見学し、繁華街の明洞を散策。夜は東大門市場で買い物。6日目は終日自由行動。7日目に仁川空港から福岡空港に帰着。

サッカーのワールドカップも手伝って韓国に対する関心が高まっており、韓国映画やテレビのドラマ、あるいは韓国人歌手が人気を呼んでいる。しかし、多くの女子学生がまず思い浮かべるのは、やはりエステ、韓国料理などが中心となるのが実状である。このプログラムは、こうした状況を背景に、近くて遠い国と言われる韓国の文化を幅広く肌で感じるとともに、日韓の歴史に思いをいたし、若い世代自らが新しい日韓関係を築いていって欲しいとの願いも込めて組んだものである。プログラムには一般のバック旅行で行くところも含まれているが、特に友鹿洞と全州教育大学訪問は今回の研修をより有意義にする要素であったと思う。

友鹿洞では、事前に観光会社経由で依頼をしていたこともあって、金泰烈氏が説明役を買ってくださったので、沙也可の直系子孫にお会いすることができた。質問にも丁寧な答えてもらえた。大義のない侵略に大きな疑問を感じて、敵の朝鮮側に寝返った先祖のことを話す金氏はこころなしに誇らしげであった。なにかタイムスリップしたような感覚を覚えた学生もいたようだ。

本学と全州教育大学は1985年に姉妹校提携したが、交流は1999年以降全く途絶えていた。フィールドワーク開講をきっかけに同大学との交流を再開することを先方に申し入れた結果、快諾してもらったので今回の同大学訪問が実現した。日程と全体プログラムの関係で同大学訪問は一日だけであったが、関係の先生方と学生から歓待を受けた。学生たちは女子寮に宿泊させてもらい、韓国人学生と相部屋で一晩を過ごした。コミュニケーションは英語が基本となったが、韓国人学生の中には多少とも日本語ができる者がいたり、日韓・韓日辞書のパソコンソフトを使って補ったりする者がいたり、そうでない学生同士は身振り手振りをまじえたりと、いずれも苦勞しながらなんとか意思疎通を行えたようだ。もっと交流の時間が欲しかったというのが大方の感想であったが、見ず知らずの外国人同士が短時間の間にも仲良くなれるという経験は貴重だったと思う。来年度以降も基本的には同じプログラムを進めたいと思う。(藤本)

§ 国際文化研究Ⅳ (対象国：フランス。参加学生：人間文化学科2年生11名、3年生2名。引率教員：河合優、佐伯郁郎。平成14年9月3日～14日)

【現地調査の内容・感想等】 ルーヴル美術館とオルセー美術館の二大美術館を中心に美術鑑賞し、西洋芸術文化の歴史と現状を学習する。さらに、各種の歴史的建造物の鑑賞を行い、歴史を刻んだ街並みと人々の生活・ファッションなどをスケッチや写真で記録する。

初日は広島空港から福岡、シンガポール経由でパリに向け出発。2日目の早朝にパリ着。早速ベルサイユ宮殿を見学。午後は自由行動。3日目はフォンテーヌブロー、バルビゾンを訪問の後、ピカソ美術館で鑑賞。4日目は地下鉄(メトロ)で移動し、ルーヴル美術館で自由鑑賞。5日目はオルセー美術館で自由鑑賞。6日目は自由研究の日でグループに分かれて行動。7日目はロワールの古城巡り。8日目は2回目の自由研究日。9日目は3回目の自由研究日。10日目にパリから帰途につくが、飛行機便の関係でシンガポールで一泊。11日目にシンガポールで観光の後、真夜中便(01:10発)で広島に向かう。12日目の朝09:40に広島空港に着。

今回の調査は、11泊12日の日程であったが、遠距離フライトのため、実質的な調査活動は8日間であった。美術鑑賞を中心としてフィールドワークという視点から、コースおよび内容を策定した。航空券や現地ホテルなどの手配はJTBに依頼した。当日まで、計7回の事前学習を行った。事前学習では、JTBから矢田氏にも来ていただき、注意事項の確認も行き、当日に備えた。帰国後は、事後学習を2回行き、12月3日(火)から12月20日(金)まで、芸術棟1階ギャラリーにおいて学習成果の展示を行った。

中世以来、パリはヨーロッパの文化と芸術の中心地であり、多くの美術館、博物館が存在し、芸術的雰囲気や研鑽は単に油彩画のみに止まらず、ファッションや工芸、建築、その他あらゆる文化に渡って先進的な役割を演じてきた。芸術文化や街並みをはじめとする環境の違いに目を向け、視野を広げることは、今後の学習や人生に極めて有益である。このフィールドワークの果たす役割は、参加学生だけでなく引率教員にとっても極めて大きいものであった。参加者全員、大きなトラブルに見舞われることもなく、無事所期の目的を果た

すことができた。

今回のフィールドワークの反省点、今後の課題や留意すべき事項、学生の感想などをまとめると次のようになる。この時期のパリの気温は15～20°程度。同時期の日本に比べて湿度も低く、比較的過ごしやすかった。9月のパリは、フィールドワークに最適な時期であろう。しかし、この月は他のフィールドワークや集中講義なども開講される時期であり、授業が重なっていた学生もいたので、十分注意が必要であろう。

学生の感想には、今後シンガポール経由は避けた方がいいというものが増えた。シンガポール経由は、費用は安いですが、時間のロスが大きい。とりわけ、復路は体力的にも負担が大きかった。費用は高くなるが、後は関西空港からパリへ直行した方が賢明であろう。時間の関係もあり、オプション・ツアーでのガイドによる説明が足早だったのも残念であった。学生の意見の中には、事前学習をしっかりとってガイドなしで行ってはどうかというものもあった。美術館鑑賞には、十分な事前学習が不可欠である。事前学習では、担当教員が鑑賞の方法や美術の流れなどをレクチャーしたが、学生への定着が不十分な点もあった。ビデオや書籍なども用意しておいた割には活用した学生が比較的少なかった。事前学習は、各自でも自主的にやってもらいたいものである。今後は、貴重な美術作品撮影時にはノンフラッシュにするなど、鑑賞する際のマナーも徹底して守らせたい。

貴重品の管理や時間の厳守なども、徹底して指導する必要がある。また、出入国のトイレ使用にも十分留意する必要がある。一旦搭乗口に入ったら、トイレ使用は機内に入るまで我慢するようにしなければならない。出国時の免税審査は、長蛇の列になる可能性が大きい。集団行動を乱す危険性があるので、免税審査を受ける必要のある買い物は避けた方がよい。また今回は無事であったが、パリは地下鉄を利用する時など、スリや置き引きなどが多いため、安全対策に十分留意しておく必要がある。あまり挑発的な格好は控えるようにと、服装などについても事前に十分指導しておかなければならない。

グループの中には、人間関係のトラブルも認められた。3人グループは2：1になりやすいので、グループは2人までが理想的かもしれない。自由研修などは、お互いの意見を尊重するようにとの指導が必要であろう。

学習成果の展示では、中国とともに芸術棟1階ギャラリーで学習成果を写真、絵画、レポートなどで発表した。今後は鑑賞者のことも考慮に入れ、作品のキャプションには作者名やタイトルだけでなく、モチーフになった場所なども明記しておく必要がある。

今回は、かなり無理をして引率教員を2名にしてもらえて本当に助かった。今後は、たとえ引率者が一人でも、その代わりに学生の団長などが最後尾に付いて引率者をフォローするなどの措置が不可欠であろう。(佐伯)

総 括

平成13年度は2科目のみの開講であったが、平成14年度は前後期を通じて7科目8地域・国を実施することができた(前後期の区別は1部変更されたが)。前期に実施した5科目6地域・国についての概要は詳細に記述したが、趣旨・目的と対象地域・国は異なるものの、それぞれ所期の目的を十分に達成した。学生たちの感想としては、「多くを学び貴重な経験をした」という声に代表されると思われる。また、国内・海外ともに大きなトラブルや事故がなく全員無事に帰ってきたことはなにもものにも代えられない喜びである。関係者のご尽力に衷心より感謝したい。

「フィールドワーク」は本学の数あるユニークな科目の一つであり、特に人間文化学科の学生にとっては自文化と他文化を実地に学ぶ機会が得られる重要科目としてその意義は大きい。今後も学生の興味・関心に配慮しつつ、新鮮な発見と驚きを提供できるようなプログラムを展開していきたいと考える。(藤本)